

授業形態	講義	科目名	古文入門	必選区分	必修
開講学科・学年	大日1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	古文を自ら読解する力をつけるため、詳細な解説を施すことなく現代語訳に取り組みせ、完成した学生から順に個別指導を行った。次の時間に、多くの学生にみられた誤り等について、重点的に解説をしながら、深く作品を読解することを目指した。				
取り組みの効果	個別指導を取り入れることで、これまで自分自身がわかっていなかったところに気づくことができたという声が多かった。また担当者に直接見せに行かなければならないということで、積極的に取り組む姿勢が生まれていた。				
今後の課題	時間的には余裕をもって設定しており、担当者としては、時間ぎりぎりまで取り組んでいてもかまわないというつもりであったが、学生の中には、遅くまでかかってしまう自分は他の学生よりも劣っているという意識をもってしてしまう者がいた。また適当なところで折り合いをつけてしまう学生もあり、いい加減な内容で早く提出してしまう者も少数いた。学生自身が、内容的に深化することの重要性、楽しみを見出すことができるようにすることが課題である。				

授業形態	講義	科目名	地域文化研究	必選区分	選択
開講学科・学年	大日1年		受講者数	約30名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	受講学生にフィールドワークを課し、それぞれの興味に応じて調査して発表する形式。大学周辺もしくは自宅周辺の文化的事象を調べさせることを目的とした。発表に対しては必ず口頭質問することとし、あわせて質問用紙を配布、感想を含めて、発表者一人ひとりに対するコメントを書かせるようにした。				
取り組みの効果	一人ひとりが違う興味・関心をもっているはずなので、学習者はその「違い」を認識するとともに、自分はどうかを工夫するであろうと期待した。また、学生による発表形式は教員による一方的な知識の押しつけとは異なり、教室に活気が生じ立体的な授業が展開できると期待した。				
今後の課題	フィールドワークの意義や具体的な方法をきちんと学生に伝えておく必要がある。あらかじめプレゼンテーションを意識（イメージ）したうえでの調査でないと調べたことをソースに加工することができない。また、質問・感想による参画は、はじめのうちはよいが、次第に惰性化してしまうため、途中から方法に変化をつけるなどの工夫が必要だった。				

授業形態	講義	科目名	日本語教育学 A (前期) 日本語教育学 B (後期)	必選区分	選択
開講学科・学年	大日 2 年		受講者数	約 130 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	<p>～ビジターセッション～</p> <p>【目的】 受講生が日本語教育現場の状況を知り、また日本語学習者と日本語によるコミュニケーションを体験することで、日本語学習の問題点を感じてもらうことを目的とする。</p> <p>【方法】 ゲストスピーカーを授業に招く。ゲストは日本語を外国語として「習う立場」と「教える立場」を代表する人で、①日本語学習者（各国留学生など）、②日本語教師（海外赴任経験者、本学出身者も含む）③外国人英語教員（ALT 経験者等）④日本研究者、等である。</p> <p>1) 1 名の場合は講義形式、複数の場合は小グループに分かれて、ゲストの日本語学習や日本語教授の経験を聞かせていただく。</p> <p>2) ゲストが留学生の場合は、受講生は日本に関するインタビュー（例：日本の若者文化、大学生生活、方言など）を受けたり、反対に受講生が留学生にインタビューするなどグループワークを行うこともある。</p> <p>3) 形式に関わらず質疑応答の時間を設ける。</p> <p>4) 全体のフィードバックを翌週の授業で行う。</p>				
取組みの効果	<p>実施後、受講生は課題レポートを作成する。そこでの記述を分析すると、以下のような、活動のねらいに違わぬ学びを体験していることが確認できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で学習した内容をより身近に感じた。</li> <li>・ゲストから専門的な話を聞くことができた。</li> <li>・日本語教員という仕事が具体的にイメージできた、等。</li> </ul> <p>特にゲストが本学出身者である場合、「先輩が卒業後教育現場で生き生きと活躍している姿に感動した」など、ゲストに将来のロールモデル像を重ねているものもある。キャリア教育の側面からの成果も認められた。</p>				
今後の課題	<p>受講生が多く、グループ活動はかなり大規模になるのが悩みの種である。一過性の体験でなく、そこで見出したものを深めていける仕組みを考えたい。</p>				

授業形態	講義	科目名	音声・音韻論	必選区分	選択必修
開講学科・学年	大日2年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法 を取り入れたか	<p>音声学と音韻論の2つの側面から、言語音一般の性質、また、とりわけ英語と比較して見えてくる日本語の音の性質を捉えようとする授業である。音声学（調音音声学）は、学習者自身の身体（調音器官）の感覚と運動によって理解される部分が多いので、これが意識できる方法を心掛けた。</p> <p>例えば、喉頭に指先を当てさせ、[a]・[m] / [s]・[h]と発音させて、声帯の振動の有無を確認させ、有声音と無声音の区別を理解させる。あるいは、「鼻をつまんで『ママ』と言ってみようー『ババ』になるよね？」などと誘導しながら鼻音[m]と口音[b]の区別を理解させる、など。</p> <p>音韻論は、各言語の音韻体系を認識することが基礎となるので、表記法との関係でこれを捉えられるように試みた。具体的には、日本語のローマ字表記には小学校国語で学習する訓令式表記と中学校英語で学習するヘボン式表記があるが、それぞれが日本語音韻論と（英語）音声学の観点から考案されたものであることを、si と shi、tu と tsu など例を挙げながら説明した。</p>				
取り組みの効果	とりわけ身体感覚による音声の把握には大方の学生が興味を示し、また授業中に実践している。				
今後の課題	少数ではあるが“ノリの悪い学生”がおり、これへの対処が難しい。基本的に講義科目であり、音声学・音韻論の基礎を身に付けさせることが目的であるので、恥ずかしがってやりたくなければそれでもよいのだが、「こうした発音の仕組みを自覚することが、社会で求められる口頭による表現力・プレゼンテーション能力の向上にきわめて有効である」といった実際的な動機付けを、彼女たちには示す必要があるのかもれない。				

授業形態	演習	科目名	演習 I	必選区分	必修
開講学科・学年	大日 3 年		受講者数	約 15 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法 を取り入れたか	<p>10年以上前から、徹底的に予習(精読)してもらうために、演習 I (3年ゼミ)において「反転授業」の方法を取り入れている。また、ICT(メール)も活用している。</p> <p>日本近代文学を専門とするゼミに所属する学生において、教材となる小説を読むこと自体はそれほど負担ではない。しかし、精読となると話は別である。私のゼミでは精読のための方法として、毎週課題の提出を義務づけている。</p> <p>学生は毎週、課題作品(芥川や鴎外の短編小説)を読み、疑問に感じることを1つ取り上げ、400字程度にまとめてメールで私に送る。疑問は1点に絞り、1段落で、自分なりの考えも加えて説明を展開することとなっている。浅い疑問ではなく、他のゼミ生をハッとさせるような疑問を見つけるためには何度も作品を読み返さなければならず、文章作成に毎週、何時間もかけるそうである。</p> <p>メールを受け取った私は、それをレジュメに仕立て(テーマごとに提出された課題を分類し、一人ひとりに私なりのコメントを付加する)、そのレジュメを用いて毎週のゼミを展開する。</p>				
取組みの効果	<p>ゼミ生全員が、ちゃんと小説を読めるようになるとともに、文章力も飛躍的に伸びる。</p> <p>当たり前の話であるが、芥川龍之介や森鴎外の難解な小説を毎週毎週読み込み、論理的に筋道立てて理解しようとし、それでも納得いかない箇所を他者にわかる言葉で説明するというのは、困難な作業である。そんな作業を1年間繰り返して学力がつかないはずがない。</p> <p>また、そうやって読み込んできたからこそ、教員の説明や他のゼミ生の発表も深いところまで理解できる。学生にとってたいへんではあるが、高い教育効果を上げる工夫である。</p>				
今後の課題	<p>担当者(私)の負担も大きいのが、つらい点ではあるが、今後も続けていきたい。</p> <p>芥川や鴎外を対象とするのは、作品が短いわりに、様々な方法が駆使されていることのメリットが大きいためである。こんな小説の書き方・テーマがあるのかと、学生は小説の方法論に目ざめ、それまでのような漫然とした読書をあらためるようになる。また、様々な受け止め方があることに気づく。</p> <p>ただし、違う作家でやるとまた違った効果が狙えると思うので、そういった面での模索をし続ける必要はあるかもしれない。</p>				

授業形態	実習	科目名	言語データ処理Ⅱ	必修区分	選択
開講学科・学年	大日3年		受講者数	約15名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>授業形態は講義となっているが、実際にはパソコンを操作しつつ学ぶもので、実習的な部分が多い。そのため、各回の授業内容は、HTMLで配信し、受講生はそれを見つつ、操作をすることになる。基本的にはPSI (Personalized System of Instruction: 個別化教授システム) 方式の授業であり、各自のペースで進めてゆき、適宜、全体に説明したり、躓いている受講生を指導する。</p> <p>基本的に2回で一つのテーマとなっており、テーマ毎に分析方法などの手順を、説明を見つつ操作し、テーマ毎に別データを与えて、理解したかをチェックする。</p> <p>内容はいつでも見ることができるので、教育実習等で欠席した受講生も、後日その内容を学ぶことができる。</p>				
取り組みの効果	<p>受講生各自の速度で進めるため、私語はほとんど無い。</p> <p>また、受講生同士と一緒に考え教え合うことで、理解を深めている様子が見られる。</p> <p>さらに、個別指導の時間を十分に取ることができるので、細かな指導もできるようになった。</p>				
今後の課題	<p>データ等の著作権の関係もあり、学内でしか見ることができないようにしている。それをクリアして、事前に自宅で学習することができるようにする方法を考える必要がある。</p> <p>機器の関係で、現在MM館で授業を行っているが、配当された教室は、細かく指導するには不向きなレイアウトになっている。</p> <p>MM館の教室は一斉授業用で、私が目指す授業形態には、日文学科の演習室の形態が相応しいのであるが、機器のリプレースがされていないため、仕方なくMM館で行っているが、動線が悪く、無駄が多い。</p> <p>そもそもFDは授業内容や方法の改善が一つの柱であり、もう一つの柱は授業環境の改善である。それが成されない以上、十分な効果を上げることはできない。環境の改善が望まれる。</p>				

授業形態	演習	科目名	日本語ライティングⅠ・ 日本語ライティングⅡ	必選区分	必修
開講学科・学年	短日1年		受講者数	約20名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を 取り入れたか	<p>1学年100名を6クラスに分割し、少人数制クラス編成で、担当教員は1人2クラスを担当して3名体制としました。</p> <p>共通テキストを使い、短大生の集中力にあわせ、90分のなかで〈漢字→文章→担当者と受講生で相談して決めた課題〉と指導内容に幅を持たせました。短大生は、90分持続した集中力で授業に臨むことが困難ですし、10分、20分で息抜きを挟みながら進める方が、学習に集中できると考えたためです。</p> <p>クラス編成を決めるには、初回授業における実力テストで関心のあるテーマを回答させ、関心別クラス編成としました。よって、担当者や受講生で相談して決めた課題は、担当者及びクラスごとに6種類も存在するようになりましたが、受講生の関心に沿って担当者の創意工夫をするため、意欲・関心を高める狙いに見合った方法だと考えられます。</p> <p>具体的に、各担当者の課題としていくつか挙げます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職活動に必要な文章表現力・美文字練習</li> <li>・古典の理解に基づく和歌作成</li> <li>・創作活動に資する比喩表現の練習及び、リレー小説</li> </ul>				
取り組みの効果	<p>本必修科目を落とす学生はゼロで、全員が前期後期の単位を修得しました。また、新カリキュラムになって1年目の当該学年では、進路変更や体調不良による休学・退学がありませんでした。</p> <p>授業内容は検定試験（漢字検定と文章読解・作成能力検定）に沿ったものとしていたので、ほとんどの学生が検定を受検し、受験者の8割が大学生相当の級を取得しました。1年次に検定試験が不合格だったもののなかには、2年次に合格を目指し、努力を継続している学生もいます。</p>				
今後の課題	<p>短大に対する満足度や科目の達成感は、高い評価を得ることができたと考えています。担当者への信頼は、履修後に寄せ書きを贈って感謝の気持ちを示すなどの姿で確認できました。2年次に担当者が受け持つ科目があれば履修したい、という学生も多くなりましたが、少人数制にした分、担当者の持ちゴマが嵩み、大日の科目等との兼ね合いがあって受講生の希望を叶える担当配置は出来ておりません。2年次に専門科目の担当者が変わることは、本学のような規模の大きな学校では当然ですが、一方で、教員との関係が持続せず、帰属意識を薄れさせる可能性があります。ただしこの課題は、学科長が真摯に受け止め、カリキュラムとあわせて教員配当を検討してくださっています。</p>				

授業形態	演習	科目名	情報検索基礎	必選区分	選択
開講学科・学年	短日2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	入門とはいえ、情報検索という様々な概論を把握するため、手法として、実習を導入し、理解を進める。				
取り組みの効果	大学(大日)と違い、学力格差、概論を読む(理解する)ことを不得手としているものは、概論を30分以上聞くことは難しい。また実技を通して概論にせまることも、なかなか集中力に加え、考えるなど実技から応用し、理論に結びつけることが難しい。ただし、50人中数名は理解している。				
今後の課題	上記のような、概論をどのように理解させるかが課題である。				